

番組

連吟

養老

小野寺 弘
小野 栄二
小久保正雄

隅田川

中山 清野
津村 聡子
古枝 良子

能

朝顔 坂井 音晴
熊野 坂井 音隆

安福 建雄
曾和 正博
一噌 庸二

熊野

平宗盛 野口 敦弘
村雨留 従者 野口 琢弘

武田 祥照
武田 文志
角 幸二郎
藤波 重孝

後見

観世 芳伸
木月 孚行

地謡

木原 康之
中島志津夫
谷村一太郎
津田 和忠

狂言

長光 すば 三宅 右近
目代 高澤 祐介

休憩二十分

仕舞

頼政 関根 祥六

地謡

坂口 貴信
武田 尚浩
武田 志房
浅見 重好

能

巫女 坂井 音雅
青女房 坂井 音晴
六条御息所 坂井 音重

葵上

古式 横川小聖 高井 松男
廷臣 井藤 鉄男
従者 三宅 右矩

柿原 崇志
観世新九郎
藤田 次郎

後見

武田 尚浩
寺井 栄

地謡

津田 和岳
木月 章行
木月 宣行
武田 友志
藤波 重彦
山階彌右衛門
角 寛次朗
浅見 重好

附祝言

(終了予定 午後 五時三十分)

あらすじ

熊野・村雨留(ゆや・むらさめどめ)

時は平家の全盛期、平宗盛の寵愛厚い熊野のもとに、故郷・遠江国から母の手紙が届く。「命あるうち一目会いたい」と記された年老いた母の手紙を持って熊野は宗盛のもとに暇乞いに行きます。しかし、この春の桜は熊野と見たい、また熊野を元気づけようと、花見車で清水寺に連れていかれます。浮かぬ心ながら酒宴に連なつた熊野は、清水寺から見渡せる景色を愛でて舞います。

「いかにせん 都の春も惜しけれど 馴れし東の花や散るらん」

と熊野が母の命を思つて詠んだ歌に、心打たれた宗盛はついに暇を許すのでした。

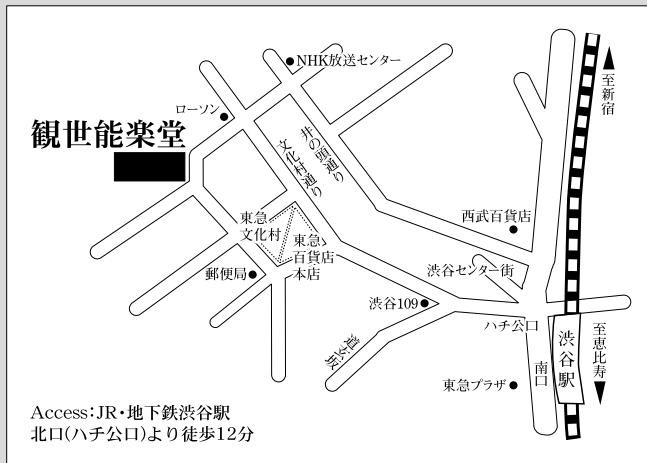
老母からの手紙をしっかりと読み上げる「文ノ段」、花見車に同車して清水へ向う「上歌」、花見の宴で舞い、村雨の散らす桜を惜しんで歌を詠む終盤と、見所の続く能です。桜を待ち、めぐる日本人の心。浮き立つ様な春の気配。春の憂いが根底に流れ美しい、能を代表する曲の一つです。

葵上・古式(あおいのうえこしき)

光源氏の正室・葵上は、物怪のために病の床にあります。その正体を知るため、照日巫女が物怪を呼び寄せたところ、現れたのは愛人であった六条御息所の生霊でした。生霊は、源氏の愛を失つた嘆きを綿々と述べ、幽界へ連れ去ろうとします。そして、急ぎ呼び出された横川の小型の祈禱により、鬼女の姿をした御息所の怨霊は、ついに祈り伏せられるのでした。

「葵上」前半の御息所の生霊とは、御息所の心の奥深くに隠されたもう一つの心を表したものです。それは怨み、悲しみ、嘆く激しい心。後半でその心は鬼の形となります。恋愛のもつれ、心象描写など生々しく心に響く演目です。

ご案内図



※駐車場がございませんので車でのご来場はご遠慮下さい。
※場内での撮影・録音・時計のアラーム及び携帯電話は固くお断りいたします。

発売開始日

平成二十二年六月一日(日)

入場料

- SS 指定席……………一、二、〇〇〇円
- S 指定席……………一〇、〇〇〇円
- A 指定席……………八、〇〇〇円
- 学生席……………三、〇〇〇円

主催 白翔會

●問い合わせ・申込み先

〒二五〇〇〇六四 東京都渋谷区上原三三二二三
坂井方 白翔會
TEL 〇三(三四六九)五二八八
FAX 〇三(三四六九)五二九九